

美術科の主張

1 教科で育みたい人間像

AI が絵までも描いてくれる時代になった。自分が試行錯誤しなくても、キーワードを入力すれば思い描いた以上の絵を描いてくれる。一方で、VUCA の時代といわれる現在、昨日までの価値が一瞬にして変わる世の中を生きている。予測困難な時代の中で、前例のない問題を解決していく力が必要とされている。そのような中、美術では何ができるのだろうか。

大昔から人々は絵を描き、ものをつくり、お互いに影響を与え合いながら独自の表現を追求してきた。特に、カメラが開発されて以降、「リアルな表現はカメラがしてくれるようになった。自分にしかできない表現は何だろう」と追求する人が現れ、今までの価値を覆すような写実にはない新しい表現を創り出してきた。最初は否定され、受け入れられなかった表現も、あきらめず表現し続けたこととその魅力を感じとり認める人が現れたことで、世の中に新しい価値を創り出してきた。美術は自分にしかできない表現を追求し続けた美術家たちの熱い想いとその想いを感じとり、認め受け入れる人がいたからこそ、発展してきたといえるだろう。

15 美術科では、育みたい人間像を「**自分も相手も大切にしながら、自分らしく未来を創造していく人**」と考えた。

世の中がどう変化したとしても自分らしくありたいと思う心や自分にしかできないことを追求する姿勢はいつの時代も変わらないのではないだろうか。また、美術がお互いのよさを受け入れ、認め合いながら新たな価値を創り出していったように、“自分らしさ”に気づいた人が、“相手らしさ”にも気づくことができたなら、お互いをかけがえのない存在として認め合い、相手のことも大切にすることができるのではないだろうか。そのような優しく温かい世の中を創る人になってほしいと願っている。

2 教科で願う学び

25 「美術の授業で知った私らしさを高校生になっても大人になっても大切にしたいです」3年間の美術の授業を終え、卒業していく子どもが卒業文集の片隅に書いてくれたメッセージだ。

美術科の表現や鑑賞をするときの中心には常に自分がいる。「この色とこの色の組み合わせがきれいな」「この形おもしろいな」など、子どもたちは造形感覚を働かせながら自分の表現を追求していく。この追求の過程にこそ美術を学ぶ意味があると感じている。

30 「○○○を表現するために、作品を浮かせたいんです。磁石の力を使えばできると思います」そうやって実験を始めた子どもがいた。自分の想いを表現するために、今まで学習したことを生かし、試行錯誤している姿は、美術の授業でめざす姿そのものであった。

美術科では、願う学びを「**感性を豊かに働かせながら、自分の想いを表現するために、造形的な視点をもって試行錯誤し、自分らしさを追求しながら新しい価値を見いだしていくこと**」とした。そのために、[① 35 題材との出会いの工夫、②造形的な視点の共有、③試行錯誤できる環境設定]を大切にしながら、授業づくりをしていきたい。子どもたちが題材に興味をもち「こうしたい」という想いをもつことができることが、試行錯誤しながら自分の表現を追求することにつながっていくだろう。また、色、形など、造形的な視点をもって取り組むことで、子どもたちは、少しずつ自分らしい色、形に気づいていくだろう。その中で自分らしさは育まれていくのではないだろうか。また、試行錯誤することができる自由な環境は、子どもたちの感性を刺激し、豊かに感性を働かせながら造形活動に取り組むことにつながるはずだ。さらに、お互いの作品を鑑賞したり、考えを共有したりすることでお互いの“らしさ”に気づくことができるのではないだろうか。これらの過程で新たな価値に気づいていく子どももいるだろう。

45 卒業文集に書いてあった私らしさとは、3年間、自分の想いをもって授業に取り組んだ経験とそれを周りに認めてもらった経験が創り出した自分らしさであると考えている。子どもたちが様々なヒト、コト、モノと向き合いながら自分らしさを育むことのできる授業をめざしていきたい。また、お互いを認め合える雰囲気大切にすることで、自分も相手も大切にすることのできる子どもが育つことを願っている。